川端康成全集

第十九卷

文學時評 Ⅳ

新潮社

川端康成全集第十九巻

文學時評 Ⅳ

昭和四十九年三月三十日　發行
昭和五十三年九月二十五日　四刷

定價　二千八百圓

著者　川端康成
發行者　佐藤亮一
印刷者　塚田重
印刷所　塚田印刷株式會社
製本所　新宿加藤製本

東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話　業務部　東京二六六—五一一一
編集部　東京二六六—五四一一
〒一六二　振替東京四—八〇八番

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

© Hideko Kawabata　Printed in Japan 1974

第十九卷　目次

昭和十四年

今日の小説……一三
文學の嘘について……二一
「文學」について……三五
——小林秀雄「文學」——
森田たま氏「花菖蒲」……四〇
小説と批評……四二
作家に就て……五三

昭和十五年—十八年

「女體開顯」について……六五
佐藤信衛著「心と形」の序……六八
文藝時評（十六年三月）……七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

先進作家の精神……一〇一
昭和二十年代
島木健作追悼……一〇五
徳田秋聲「縮圖」……一〇九
高濱虚子「虹」・「愛居」……一一四
〈定本虚子全集〉……一一六
「盗　賊」　序……一一八
横光君の未發表作品について……一二〇
沈　承　怡　君……一二四
倫理の強さ・古典の高さ……一二六
〈小林秀雄全集〉
新　文　章　論……一三八

新感覺派……一五二
「死者を嗤ふ」について……一五七
「井原西鶴」など……一五九
〈武田麟太郎　人と作品〉

昭和三十年代

「悲しみの代價」その他……一六九
文學の源泉……一七六
〈志賀直哉全集〉
「裏日本」序……一七八
—濱谷浩寫眞集—
〈安岡章太郎「花祭」評〉……一八〇
堀君の文學……一八一
〈堀辰雄全集〉

ふしぎな天才の魅惑……一八二
〈室生犀星全集〉
よみがへつた世界的古典……一八三
〈谷崎潤一郎「新々譯源氏物語」〉

昭和四十年以降

無類の個性……一八七
〈正宗白鳥全集〉
横光利一……一八八
光彩と香氣に滿ちた西歐的ロマン……二〇三
〈中河與一全集〉
百花の王……二〇四
〈谷崎潤一郎全集〉
東山魁夷「風景との對話」評……二〇五

高見　順……二〇六
吉野さんの近著……二二二
〈福永武彦「海市」評〉……二二六
多彩な美的世界……二二七
〈舟橋聖一選集〉
新感覚派……二二八
〈三島由紀夫「豐饒の海」評〉……二三〇
生きた文學史……二三一
〈河上徹太郎全集〉
〈「廣辭苑」第二版〉……二三二
吉村貞司「古佛の微笑と悲しみ」評……二三四
尊い希求の情熱……二三五
〈中村光夫全集〉

芥川龍之介賞選評……二三七
横光利一賞銓衡後記……三四九
野間文藝賞選評……三五三
新潮社關係賞選評……三六七
補遺
春の鼓笛……三九三
〈池谷信三郎賞選評〉
「文學時評」編輯覺書……三九五
年譜……三九七
全巻收錄作品索引……四五九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文學時評 Ⅳ

昭
和
十
四
年

今日の小説

1

「今、一年間に發表される短篇小説の數は、五百乃至千篇に及ぶ。いはゆる大衆文藝、またいはゆる同人雜誌の作品を加へると、その倍數を超えるだらう。」と、「日本小説代表作全集」の卷首に、私は編纂者の一人として書いておいた。「本書は、約言すれば、それら百千の小説中から、その年と各作家とを眞に代表するに足る傑作を選び集めて……。」と、次に續けた言葉は、いささか廣告口調だが、編纂者も出版者も、さういふ心構へではあつた。そして、大凡の理想に近い「第一卷」を得たと信じてゐる。念のために言へば、編纂者は、武田麟太郎氏、間宮茂輔氏に私の加はつた三名である。年鑑風な小説選集で、第一卷は「昭和十三年前半期」の分である。「國を擧げての戰ひの最中に、この第一卷を出し得るといふことも、種々と思ひが深い。」

その月を追ひ、その月に消えるやうな、あわただしい文藝時評としては、或ひは少し季節おくれか

と思ひながら、ここに「第一卷」について、心に浮ぶままの印象を書いてみたいと考へるのも、私がこの書に愛着を寄せてゐるからである。その愛着は、自分が編纂者の一人であるせゐばかりではない。自分が書中の諸作家と同じ日に生きる作家の一人だからである。よかれ惡かれ、これが日本の私達の小說であると思ふと、ひとごとではない。

「編纂者等は年少の身でありながら高きに立つて作品を選ぶといふ心ではなく、自分達の文學の傑れた作品を稱へ護るといふ喜びで、この仕事を續ける。」と、私はやはり序文のなかに書いてゐる。これにいつはりはない。いはば共に住む作家の勞作に面しては、自然と微妙な共感が先立つてゐるもので、よしんばことごとくの作家が、現在は自分の價値が十分に認められてをらず、將來更に高く評價されるであらうといふやうな、嘆きと慰めとを多少は胸にひそませてゐようとも、同時代の讀者のありがたさは格別なものなのではあるまいか。

などと言ふことが既に、實は甚だしく現代的な俗論であつて、私並びに文壇が太平の夢をむさぼり、萎靡沈滯してゐる證據だとは、無論考へられる。つまり、文學は餘り時代に先行してはゐないのである。時代と一種の飽和にある。文學者がこの飽和に甘んじてゐないのは言ふまでもないことで、飽和を恥ぢながら拔け切れぬところに、文學の空の低い曇天が續いてゐた。今度の戰爭で、それがどういふ風に破れるか、新しい年の文學のなによりの問題である。その問題が躍進せぬ限り、或る意味では、文學史上の今日は空白である。

例へば、その日に不遇だつた作家の價値が後の日に改めて認識されるといふやうなことは、文學史の文學史たる所以の、最もつかまへやすい目じるしであつて、それがない時は書きにくいのである。ところが、今日さういふ作家はゐるであらうか。いつの時代もその時代の作品に對しては、一面不遜なものであつて、かういふことも後になつてみなければ正しくは分らないのだが、先づ今日は、その

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com